

Title	隠喩的対話という技法：「語り得なさ」をめぐる当事者実践の社会学
Sub Title	
Author	澤田, 唯人(Sawada, Tadato)
Publisher	三田社会学会
Publication year	2014
Jtitle	三田社会学 (Mita journal of sociology). No.19 (2014. 7) ,p.34- 54
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集：生きられる経験/当事者/当事者研究
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA11358103-20140705-0034

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

隠喩的対話という技法

—「語り得なさ」をめぐる当事者実践の社会学—

澤田 唯人

1. はじめに——「物語生成の条件」への問い

病いや障害、差別や暴力などを生き抜こうとする人々は、ときにその経験をめぐる語り得なさに直面する。それは当人にとって、社会的に分有された言語の使用規則や、すでにある物語のプロットでは、〈個別的な生〉が切りつめられていく事態として、またそうした支配的な言説空間の中では、自らを語る言葉や新たなプロットを見出すことができない困難として立ち現れる。そのため、自律した言語システムによっては汲み尽くせない層から発せられる当事者の語りは、それを聴く者だけでなく、語り手自身にとっても、常に「わからなさ」や「どうしようもなさ」といった混沌を差し向ける。『傷ついた物語の語り手』の著者アーサー・W・フランクは、こうした混沌の語りについて、次のように記している。

混沌の語りが、傷口の縁の上で語られているのだとすれば、それらはまた発せられた言葉の縁の上で語られている……。つまり、混沌とは、言葉が見通すことも照らし出すこともできない沈黙の中で語られるのである。混沌の語りは常に語られた言葉を超えて存在する。したがってそれは、語られた言葉の中には常に欠落している。混沌は、……語りの中に穿たれた穴である。(Frank 1995=2002: 145、傍点一部は引用者)

なまなましい傷口のように、その語りの中に《穴》として現れる混沌は、容易には縫いあわせることができないものとして、「語る」という行為それ自体を妨げる。

しかし、私たちは、そこに新たな言葉や物語が紡がれていく可能性を全く考えることができないわけではない(鈴木 2008: 15)。人は、生き延びるために、混沌を抱えた層の経験を、何とかして言葉にし、他者に向けて語りだそうとすることがある。そのような営みは、リハビリ臨床や看護ケア、当事者研究などの実践の中にみることができる。それは、通常考えられるように、語りの中に《穴》として現れる混沌を、さらに言語によって「分節化」し、当事者に語らせようとするものではない。それは、一種の暴力である。だからそこには、物事を言葉で「分ける」ことによってではなく、何かに「なぞらえる」ことによってはじめて紡がれていく語りがある。そうした「語りの生成」を支える対話のあり方を、私は「隠喩的対話」と呼びたいと思う。そしてそこには、混沌を語り／聴き、投げ出し／受けとめようとする、自己と他者との対話的な関係性を考えるためのヒントがあるようにも思われる。

本稿では、「語り得なさ」を抱えた層の経験が、当事者によって隠喩的に語りだされていく場面を追うことで、語りの生成・再編成の可能性とその条件について考えてみたい。それは、当事者たちの実践に学びながら、「語り得るもの」と「語り得ないもの」という構築主義的な二項対立や、「生活世界の成り立ち」それ自体を問い直す社会学的な試みである。

2. 「語りの生成」事例——痛み・感情・他者という経験

(1) 患者 L・M の「痛み」——“重すぎる毛布”

重篤な痛みは、数値的には計れない。もちろん、痛みの「大きさ」はスケール化することができるが、それが具体的に生きられている様相を把握することは難しい。また、当事者は痛みについて単に尋ねられても、「ひどく痛む」、「ズキズキする」といった断片的な言葉を発することしかできない。そのため、痛みのケアに当たるリハビリテーション・セラピストたち（理学療法士・作業療法士）は、主観的な痛みの様相を把握する手がかりを得るための対話的な技法を編みだしていく。これについて、カルロ・ペルフェッティは「それは何みたいですか（何に喩えられますか）？」という問いかけと、それに応え、「痛みを記述する患者のメタファー（比喩的言語）がどんなに重要であったか」（Perfetti 2006=2010: 138）を報告している。ここでは、彼のチームと患者 L・M との対話をみていこう。

L・M は、交通事故で左上肢の複合骨折と腕神経叢の部分損傷を負った（上腕骨頭が四つに割れて脱臼し、肘頭と尺骨の近位骨幹端を骨折）。治療を始めた当初、L・M は、少しでも身体の姿勢を変えようとする、強い痛みが襲って何もできなくなり、ただ「左側に非常に強い痛みが広範囲にある」と訴えるばかりだった。そのため、「最大の問題は、痛みの『障害』であり、痛みのためにセラピストが病的要素の程度を評価できないこと」（ibid.: 138-9）にあった。そこでチームは、次のような助言をペルフェッティから受けている。

リハビリテーション（認知運動療法）では、患者のメタファー（比喩的言語）だけでなく、セラピストの使うメタファーを分析することも有用である。痛みを、君たちが何かの「障害」として定義しているならば、……〔患者も〕痛みは障害、あるいは外部からの阻害要因だという視点にたったメタファーをよく使う。そして、とにかく痛みを自分の身体から除外してもらいたいものとして言語記述することが多い。……今までとは異なる視点から痛みを解釈するように努めてほしい。……患者は往々にして痛みについてなかなか語るができない。患者が記述する言葉（メタファー）に注意を傾けて、痛みを位置づけるヒントを探っていく必要がある。（ibid.: 139-41、[] 内は引用者）

ここで重要なことは、セラピストたちの「障害」というメタファーに基づく痛みの素朴な聞き取りが、実は患者にそれに沿うような表現で痛みを語らせている（それ以外のメタファーに基づく語りを制約している）という指摘である。そこでチームは、L・M の注意を「痛みでは

なく身体に向かわせるように試み、以前よりも的を絞った質問を向けていった」という (ibid. : 144)。すると L・M は、以前は語り得なかった痛みを語りだしていく。

毛布なのです。……私の上肢をすっぽりと包み込んでいて、その重みがのしかかってきます。それを引き剥がすことも……、軽くすることもできないのです。(ibid. : 144)

ここで語られている「毛布」は隠喩であり、実在する毛布のことではない。ペルフェッティによれば、「毛布」のメタファーはかなり独創的で、大変興味深いだけでなく、「このメタファーとそれに続く患者自身の説明は、ほかのメタファーよりも明確に、身体の状態を正確に反映している」。そして「L・M は、このメタファーや説明を使うことで、セラピストに何とかして次のことを伝えようとしているのである。『骨折して痛みのある上肢を思うと、たとえばあなたが自分の上肢が毛布に覆われてしまったときに感じるような思いがするのです』、と。その毛布もただの毛布ではない。のしかかるように重い毛布であり、剥ぎ取ろうとしてもできないし、軽くすることもできない毛布なのだ」、と (ibid. : 144-5)。

こうして紡がれるメタフォリカルな語りは、しかし、聞き手（セラピスト）の側の工夫によってのみ可能となったと考えてはならない。むしろそこには、語り手の側の主体的な営為が存在している。この点について、ペルフェッティは次のような仮説を述べている。

セラピストが痛みの経験を言語記述するように、つまりこの状況で腕がどのような感じなのかを記述するように要請すると、患者は言語で記述しなければならないものを、[まずは] 体性感覚イメージとして処理しなければならなくなる。この作業（痛みのイメージを記述化すること）は、それほど簡単なものではない。……L・M はセラピストの質問に適切に答え、自分の経験を理解してもらうために、長期記憶の中に適切なイメージを探さなければならなくなる。言語記述するのが体性感覚イメージよりも容易で、セラピストたちと共用できるようなイメージであり、それと同時に自分の身体感覚と十分に相関関係をもつイメージを探さなければならぬ。(ibid. : 144、傍点および [] 内は引用者)

大切なことは、語り手が「痛み」という一人称的な意識経験を、聞き手と具体的に「共用できる」ようなイメージになぞらえようとしている点である。実際、L・M とセラピストたちは、「毛布」のメタファーを起点に、共同で「骨折や腕神経叢への損傷からくる特異な運動の異常を明確にしてゆく」ことになる (ibid. : 138)。そこには、前述のように、語りだされる独創的な隠喩表現を、聞き手が言葉遊びと軽んじることなく、真剣に受けとめてくれる、という〈開かれた〉構えが存在している。そのことを裏づけるように、治療の過程で、「毛布」のメタファーは、「万力に締め付けられて自由に動けない感じ」、「下のほうに私を引っ張り下ろそうとする鉛のような感じ」、「スーツケースを四つ持っているような感じ」、「ゴムではなく針金のように

硬い糸が引っ張る感じ」といった具合に、次々と変質し、何度も語り直されるにもかかわらず、セラピストたちは、むしろそれを L・M の痛みの現状や変化を把握する重要な手がかりとして受けとめ、「毛布」を取り除くケアを組み立てていく (ibid.: 152)。そしてついには、語りの中から「毛布」が消えていくのである。

セラピスト： 残っている痛みの感覚は、どんなものに喩えることができますか？

L・M： 今は説明するのが難しいです。

セラピスト： 以前は痛みを何かに喩えて説明してくれることができていました。

L・M： 今では痛みが随分と少なくなったので、言語記述したり、何かに喩えたりするのが難しいです。……ほかに何て言ったらよいのかわかりません。言えるとしたら、そうですね、もう毛布はありません。(ibid.: 153)

この語りからは、L・M の痛みが、もう隠喩によってしか記述できないほどの語り得なさを抱えていないことがわかる。それは裏を返せば、以前の L・M が、痛みによる混沌＝《穴》をその語りの中に抱えながらも、それを言葉で「切り分ける」のではなく、ほかの何かに「なぞらえる」ことで、何とか言葉を紡ぎだそうとしていたことを逆説的に示している。

ペルフェッティは、グレゴリー・ベイトソンの理論に基づき、患者とのあいだで起きていたこの特異な対話のあり方について、次のようにセラピストたちに説明している。

治療開始当時の L・M は、末梢の組織レベルでの変化のために、体性感覚の差異をとらえることができず、現実の意味を付与することができていなかった。君たちの仕事とその成果の意味を十分に理解するためには、Bateson の理論を……参考にするのが良いだろう。それは「差異」とは対極にあると思われる「類似」についての理論である。Bateson は差異と類似を、現実をとらえるために精神が活用する「メカニズム」として……、「差異を生み出す差異」の存在だけでなく、「結びつける機構」の存在も重要だとしている。人間が何かを知ろうとする状況にあつては「差異」を捉えるだけが有意味なのではない。認知にたどり着くための心的作業を正しく活性化させるためには、……二つの状況に共通する側面を見つけ出すことも必要なのである。L・M のケースで、君たちが治療開始時に使ったのが「類似」なのだと言える。(ibid.: 150、傍点は引用者)

「差異を生み出す差異」の体系（自律的な言語システム）の中では、語るという行為それ自体さえ難しかった痛みが、「類似」による語りを現実として受けとめてくれる他者との対話の中では、隠喩的に語りだされうること、そのことをソーシャル由来の言語観に慣れ親しんだ私たち（社会学者）はいったいどのように考えればよいのだろうか。後節で検討する論点の一つだけ析出しておこう。それは、「痛み」という極めて主観的な意識経験が、ほかならぬメタ

ファーによってはじめて、他者との間主観的な了解へと導かれている、という事実である。間主観性が「社会的なもの」を織りなす地盤であるとすれば、そうした地盤それ自体が紡がれ、生成されつつある場面であって、隠喩がどのような役割を果たし、どのように私たちの生をかたちづくっているのかが問われる必要がある。世界をより分け、整序する差異の体系（意味秩序の網の目）が、痛みという侵襲によって掘り崩され、曖昧なものとなったとき、そこにもう一度言葉を与え、世界を他者ととともに構成し直そうとするまさにそのとき、人間の語りは隠喩的なものとなる。つまり本事例は、語りの生成が、「差異」よりも、「隠喩」とより深い関係にあることを示唆しているのである。

（２）脱文脈化された「感情」——“ピンボールみたいに跳ねまわる”

その時、その場所で、あなたが生きたその悲しみと、あの時、あの場所で、私が生きたあの悲しみは、同じ悲しみではあっても、全く異なる様相をもって生きられていた。けれども、社会に流通している一般化された感情の語彙によっては、それらはいずれも「悲しい」としか表現することができない。画一化された感情の語彙は、常に個別具体的に生きられている感情の表層のみを切りとり、そのかけがえのなさ（singularity）をそぎ落していく。感情と言語のこうした「不自由な逆説」を、本来は誰もが抱えながら生きている。

しかし、私たちは、この感情と言語の不自由な関係性を取り立てて意識することなく日々の生活を送ることができている。それは私たちが、そうした不自由さを感じずに円滑に社会生活を営めるよう、感情の「文脈的な理解可能性」をめぐるヘゲモニーを社会から与えられているからである（岡原 1997: 4）。同じ感情語が割り振られる感情であっても、それが具体的に置かれている文脈の違いから、その感情が生きられている様相をさしあたり理解できる多数派にとって、感情と言語の不自由さが社会生活を煩わせることは少ない。

だが、裏を返せば、そこには常に「感情と言語の不自由な関係性」を一方向的に引き受けさせられ、自らが生きる感情を、社会的に理解可能な文脈からは逸脱したものとしてしか経験できない人々が存在している。自らが抱く感情についての文脈的な理解可能性を社会的に奪われているマイノリティ（感情逸脱者）にとって、それでも他者との対話の中で、自らが生きている感情の様相を語りだそうすることは、脱文脈的な混沌へと言葉を紡ぎだしていくことを意味する。ここでは、現代社会において感情逸脱者のラベルを付与されている「境界性パーソナリティ障害（Borderline Personality Disorder: BPD）」を生きる当事者たちの語りをみていこう。

『DSM-IV（精神障害の診断と統計の手引き）』によれば、BPD とは、一般的に「不安定な自己 - 他者イメージ」、「見捨てられることへの強い不安や不適切な怒りの制御困難」、「衝動的な自己破壊的行為」によって特徴づけられる。もちろん、この疾患カテゴリー自体の社会的構築性は問われなければならない。例えば、高岡健は『人格障害の虚像——ラベルを貼ること、剥がすこと』において、パーソナリティ障害に関する正常／異常の線引きが恣意性を孕むことを指摘している（高岡 2003）。加えて、「感情管理化社会」という現代社会の趨勢は、それが高ま

れば高まるほど、「感情管理」能力の劣る者を病理化し、医療化していく、という逆説を孕んでいる（澤田 2013）。さらには、再帰的近代化に伴う存在論的不安や発達段階をめぐる文化的変容など、社会学的な原因論を構成することもできるだろう。だが本稿では、それらの議論には立ち入らない。支配的な言説空間の中で文脈的な理解可能性を奪われた当事者たちの生に、「社会学的な」文脈や理解を与えていくことが本稿の目的ではないからである。「語り得なさ」をめぐる当事者たちの生きられた実践に学ぶのである。

野間俊一によれば、BPD を生きる当事者が、他者（セラピストや精神科医、家族や恋人などの親密な関係にある非当事者）との対話の中で紡ぎだす語りには、ある特徴がみられるという（野間 2001）。それは、いわば文脈（＝地）を欠いているところに、自らの感情の様相（＝図）を彫り出していくような、鋭利で触覚的な隠喩表現である。例えば、他人の言葉が「グサッ」と突き刺さる」や「ズキン」と響く」といった、それを聴く者の身体に訴える語り。また同様に、次のような触覚的ななぞらえによる語りもみることができる。

自分のことをひどく憎んでいるから物事をまっすぐに見ることができないの。自己嫌悪の中にどっぷり浸かっていると、……憎しみが洪水のように周りの人や物に溢れていくわ。そうすると、みんなのことを——主に夫に対してだけ——大嫌いになって当然だっと思うのよ。（Cauwels 1992: 53、下線は引用者）

私の要求は壊れやすいダムの水みたいに湧き出してくる。ダムを破壊させないことで精一杯よ。でも違うわね。彼（恋人）も私を必要としているんだから。たぶん安全よ。要求という水を湛えたダムの岩を叩き壊すの。私は流れにさらわれて、あちこち投げ飛ばされて、ピンボールみたいに跳ねまわるのよ。コントロールはできない。誰にも止められないの。ひとりで動いているんだから。（Linehan 1993: 34、下線は引用者）

こうした触覚的で隠喩的な語りは、社会的に理解可能な文脈からは逸脱しているとみなされる自らの感情や行為（＝図）に、他者にも理解可能な「なぞらえ」によって文脈（＝地）を与えようとする試みであるように思われる——「私がそうしてしまうのは、憎しみが洪水のように溢れ、私をのみ込み、ピンボールのようにあちこちに投げ飛ばすからなのだ」、と。

そして、当事者の語りと真剣に向き合うのであれば、この隠喩的に紡ぎだされた文脈が、全く事後的に作り出された虚構などではなく、確かにそのように生きられている現実であると受けとめる必要がある。生きられてはいるが、日常的な言語使用にしたがっては語り得ないがゆえに、それを語りだそうとする当事者の言葉は、不可避に隠喩性を帯びざるを得ない。つまり当事者は、紛れもなくそのように世界を経験しているのである（澤田 2014: 49）。

ところで、先の「痛み」をめぐる患者 L・M の語りは、聞き手の側からの隠喩的な問いかけ（「それは何に喩えられますか？」）をきっかけに語りだされていた。対して、ここでの BPD 当

事者のそれは、語り手の側から聞き手に差し出されている。このことは、隠喩的な対話が、「対話」という相互性をもちうるということ以上に、聞き手が当事者の経験を理解するための文脈を保持していない（それゆえに逸脱だとみなしている）可能性を語り手が予期し、オルタナティブなそれを積極的に提示しようとしていることを示唆している。それはまた、痛みが一義的には身体における《傷》に由来しているのに対して、感情が他者関係における（文脈レベルにおける）《傷》をその生成の条件として、すでにして含み込んでいるからだとも言えるだろう。次の BPD 当事者の隠喩的な語りは、この点に関わっている。

僕は、完全に親密な関係には、境界はないものだと思いながら育ったよ。境界というのは、ただ人と人の間の裂け目を意味していたんだ。境界があるというのは、孤独で孤立していなければならない。つまり、自己同一性を持っているってことだった。孤立した自己同一性をもつということは、僕をいい気分にしてくれるようなものではなかったよ。僕に必要なのは、すっかり巻き込まれてしまうか、完全に孤立するかのどちらかだったんだから。（Manson & Kreger 1998=2007: 44、下線は引用者）

彼が隠喩的に語る「人と人の裂け目」とは、どのような事態をなぞらえているのだろうか。もしかすると、BPD 当事者たちによる触覚的でメタフォリカルな感情の語りとは、自らの経験に理解可能な文脈を与え、聞き手を含む他者とのあいだに生じている《裂け目》を何とか縫いあわせていこうとする対話的な努力なのかもしれない。痛みをめぐる隠喩的な対話が「痛みの様相」だけを焦点としていたのに対し、感情をめぐるそれは、「感情の様相」だけでなく、むしろそれを理解可能なもの（＝図）として浮き上がらせるための文脈（＝地）までもが隠喩的に紡ぎだされている。それは、先にも述べたように、感情を生きるということが、すでにして他者関係をめぐる文脈に生じうる《傷》の現象だからである。

だがさて、感情だけでなく、痛みの事例（「重すぎる毛布」）でもそうであったように、なぜ語り得なさを抱えた層の経験を語りだそうとする当事者たちの隠喩は、どれも触覚的なのだろうか。そしてそのことを、社会の様相を「演劇」や「システム」、「構造」などになぞらえ、視覚的に捉えることに専心してきた私たち（社会学者）は、いったいどのように考えるべきなのだろうか。ユージン・ミンコフスキーは、この点を考えるための手がかりを示している。

科学は、比喩をせいぜい巧みな面白い慰めごととしか考えないであろう。しかし、現代の偉大なる哲学者ベルグソンが繰り返し説くごとく、我々の生には論理的思惟をもってしては決して捉えることのできぬ重要な一面がある。意識の直接的所与は比喩的なものであって、我々は、こうした事態を正しく把握するよう努めねばならぬ。ここに現実との生ける接触という概念が登場する。現実との生ける接触は、我々を圍繞するところの大いなる流動 (Milieu) であ[る]。（Minkowski 1953=1954: 73、[] 内は引用者）

ここには、重大な発想の転換が示されている。それは、世界がそもそも隠喩的に与えられている、という点である。私たちは、「語り得なさ」を抱えた経験（重篤な痛みや文脈的理解を欠いた感情）を語りだそうとするときにのみ、隠喩が駆使されるのだと考えてきた。しかしそれは、あくまでも極限事例に過ぎず、私たちが生きている意味世界とは、いつもすでに隠喩によって支えられていると彼は述べるのである。そして、そのような事態を正しく理解するためには、私たちが《現実との生ける接触》という大いなる流動（ミリュー）の中を生きる触覚的存在であることに立ち還る必要があるという。だがそれは、いったいどのように世界を把握することを意味するのだろうか。ここでも、のちに検討する論点を一つだけ析出しておこう。それは、経験世界それ自体が、そもそも隠喩的に構成されているのだとして、そのことが忘却された「日常的世界」とは、どのように成立しうるのか、という点である。経験世界をめぐる「語り得るもの」と「語り得ないもの」という二項対立を乗り越えるためには、それらを地続きのものとして把握し直すための認識論的転換が不可欠となるのである。

（３）不確かな「交流」——“視線がピッと絡む”

ここまで、「痛み」や「感情」という語り得なさを抱えた経験を、触覚的な隠喩表現を用いて、懸命に語りだそうとする当事者たちの対話的实践をみてきた。誤解を恐れずに類型化すれば、痛みはその強度によって、感情はその社会的な脱文脈化によって、当事者たちに語り得なさという混沌を差し向けていた。しかし、人間に語り得なさを差し向けるかたちはそれだけではない。痛みや感情の場合、当事者はそれが自らに生きられていることを確信している。だが、当事者自身にとってさえ、それが生きられているかどうかを確信できないような、「不確かさ」を抱えた経験もまた、語り得なさを抱えうる。ここでは、従来の医学的な定義にしたがえば、「外界との交流を一切もたない」とされる、いわゆる「植物状態」患者のケアにあたる看護師の語りをみていこう。ある看護師は、言葉に迷いながらも、患者とのあいだで生きられている「不確かな」交流の経験を、次のように語っている。

やっぱりうまくは言えないけど、なんだろう、目を見たらなんとなくこっちの目と視線が合うような気がしてたんです。なんとなく視線が。で、目と目が合うっていうのは、やっぱりなんか通じるものがあるって思うけども。……こうある瞬時で、なんかこうやっぱり〈視線がピッと絡む〉みたいところはあるような気がする。そういう〈視線が絡む〉みたいところがあるような瞬間が、瞬間として捉えられる。プライマリー〔ナース〕だから捉えられるのかもしれない、うーん。（西村 2001: 80-1、[] 内は引用者）

《視線がピッと絡む》という触覚的な隠喩は、当事者である看護師にも、うまく言葉では分節化できない“わからなさ”を、けれども確かにそのように経験されてしまう“どうしようもなさ”を内包している。西村ユミは、この語りについて次のように述べている。

日常語で言語化することが困難であったからこそ、「視線が絡む」のような比喩的な表現として語られたのである。……語りに見られる比喩的な表現は、単なる比喩というのではなく、そうとしか表現できなかった〈身体〉固有の次元におけるいとなみの言語化とも考えられる。……目で見たり耳で聞くといい、諸感覚機能が分化して働きだしている経験を語るのであれば、敢えて比喩的な表現を用いなくとも容易に言語化でき、伝えることができよう。ところが目で物に触れる、耳で何かを見るといった感覚が交差した共感覚的知覚は、日常語によってうまく言い当てることは難しい。それ故に、比喩と思われるような表現でしか語ることができないのである。A さん [上記引用の語り手] は躊躇しつつ、幾度も言葉を換えながら、何とかして自分の知覚経験を意味する表現にたどり着こうとしている。こうした表現が、前意識的な層における経験を伝える言葉になっているとは断定できないが、このような語りの内にそうした経験が僅かながら姿を見せてくれているように思われる。……こうした語りこそが、前意識的な層 [で生きられている経験] へと分け入る道しるべになっている。(ibid.: 212-3、[] 内は引用者)

諸感覚の機能が分化して働きだしている層の経験であれば、日常言語による分節化を施して語ることができるのに対し、それらが互い癒着し、いまだ曖昧な混沌の中でしか生きられない共感覚的な層の経験——モーリス・メルロ＝ポンティはそれを「経験の原初的な地層」(Merleau-Ponty 1945=1967: 168) と呼ぶ——であればあるほど、当事者はメタフォリカルに、それも《触れる》という原基的な経験に根ざした隠喩によってしか語りを紡ぎだしていくことができない。そのような様相で差し向けられる「語り得なさ」がある。

おそらく、ここまでの事例から示された、「語り得なさ」を人間にもたらす様相の諸類型——①言語を超過する強度、②文脈の欠落、③共感覚的な地層の露出——は、実際には互いに重なり合いながら当事者たちに生きられ、語りの中に《穴》を穿つ侵襲として経験されているのであろう。例えば、「発達障害」当事者研究に取り組む綾屋紗月は、自らが生きた苦しみを次のように述べる。「疎外感によって胸がえぐられたり、全身が緊張して固まったり、息ができなくなったりするその心身の強烈な感覚や構えは、『今、ここで、私が、どうして、その疎外感を味わったのか』という『現在における文脈』を一瞬にして喪失させてしまう」のである、と(綾屋 2011: 63)。そして彼女もまた、そうしたいまだ言語分節的に意味づけられていない世界を、《水の中にいるよう》と、触覚的な隠喩によって表現する(綾屋 & 熊谷 2010: 75)。

私の見る限り、「当事者研究」という営みは、既存の支配的な言説空間の中では汲み尽くすことのできない当事者たちの経験について、そこに共同でオルタナティブな説明を加えていくその前に、当事者同士の対話の中で、メタフォリカルに自らの経験を把握していく点にこそ、大きな独自性と強みがあるように思われる。そうした当事者研究の擁する対話的空間は、「自身の体験を言い当てる言葉を貪欲に探し求める」(熊谷 2012: 95) という意味において、「隠喩的な語り」に開かれている稀有な空間だといってよい。

同様のことは、研究者がその研究対象の当事者でもありながら、別の当事者へと聞き取りをおこなう空間にも妥当する。例えば、先の《視線がピッと絡む》という隠喩的な語りは、それを聞き取った西村自身もまた、「植物状態」患者へのケアに当たりながら、自らも患者との「不確かな」交流を生きていた当事者であったことが、一つの「条件」となって語りだされたのかもしれない。榊原哲也は、この点について次のように述べる。「西村の場合、自身もナースであり、同じような身体的経験をもち合わせていた。そのことが対話の中で（語り手と）同じ間身体的次元の深みへと至る通路を開いた、ということとはできないだろうか」と（榊原 2011: 13）。

同じことは、自らも摂食障害の当事者でありながら、社会学者として、ほかの当事者の経験へとアプローチする宮下阿子の議論にも妥当する。彼女によれば、聞き手も当事者であることが、「対話的還元」と呼びうるユニークな対話を可能にするという。詳しくは本特集の宮下論文を参照してもらいたい。ここでは、《スイッチが入る》という表現で「過食嘔吐」に突入する場面が語られていく。これもまた、身体的な触覚に根ざした「隠喩的な語り」である。

さて、以上のように、臨床場面や当事者研究の中で、「語り得なさ」をめぐる必ずしも意識されずに営まれている「隠喩的対話」という技法、この実践の条件に社会学はいかにしてわけ入ることができるだろうか。あるいはそれを、どのように「語り（narrative）」の調査・分析へと応用していくことができるだろうか。この点を三つ目の論点としておきたい。

3. 経験世界の隠喩的な成り立ち

前節でみてきた「語りの生成」を支える隠喩的対話は、もしかすると、私たちが他者とともに住まう生活世界——間主観的な意味世界——の成り立ちの過程を、「ゼロ」から再現しているのだとはいえないだろうか。言語的に構成された意味世界に「混沌」という《穴》が穿たれることで、部分的にではあれ、世界は意味を剥奪され、原初的な非意味的な世界がその《穴》から顔を覗かせる。そのとき人は、分節化や差異化をそこに施すことによってではなく、その様相をほかの事柄になぞらえていく「隠喩」という行為によって意味を紡ぎだそうとする。そうした表現が、いずれの事例においても《触覚的な肉》の感覚に根ざしていたことは、おそらく偶然ではない。フランクが「混沌」を傷口だとみなしていたように、意味秩序の中に穿たれた《穴》を、あるいはその破れ目から露出し、剥きだされてくる得体の知れない《ナニカ》を、隠喩という「糸」を用いて縫いあわせていく作業は、常に意味に包まれてしか生きることができない人間にとって、《裂けた皮膚》を縫いあわせていくことと同じなのである。そのことを裏づけるように、ミンコフスキーもまた、「比喩的に生きられる事態」が、世界との《剥きだしの接触》を意味していると論じていた。

このように、「語りの生成」をめぐる実践は、いずれも他者との対話の中で、隠喩的に意味を紡ぎだし、《赤く剥きだされた》世界を、再び「意味に包まれた」世界へと包摂しようとする営みであったように思われる。つまり、隠喩的対話とは、私たちにとって最も原初的な相互行為のかたちを再現している可能性があるのである。本節では、各事例から析出してきた論点を踏

まえ、「隠喩」という行為から私たちの生活世界の成り立ちを考え直してみたい。それは、間主観性をめぐる従来の社会学的理解を根本的に問い直すものである。

(1) あるの世界ともの世界

私たちは普段、当たり前のように「ものがある」世界を生きている。しかし、ジャック・ラカンによれば、もの世界（言語・象徴の世界）と、あるの世界（存在の世界）は、本来別の次元に属している。そして、この二世界を連結させ、「ものがある」世界を成り立たせているのが、隠喩（Meta「越えて」－Phor「運ぶ」という行為）であるという。だがさて、隠喩がこれら二つの世界を結びつけているとは、いったいどういうことなのだろうか。あるいは、どのようにして私たちは、あるの世界（存在）からもの世界（言語）を分出させ、「ものがある」世界を生きようになるのだろうか。ラカンによる説明は後述するとして、ここではまず「発生論」的に、あるの世界ともの世界について素描してみよう。

よく知られるように、私たちは胎内にいる頃から生まれて間もなくまで、自他未分の世界を生きている。そこでは、自己や他者、そのほかあらゆる存在の区別はなく、ただあるということだけがある、原始的なスープの中に溶けている。私たちはそのとき、世界の中に、「ちょうど水の中に水があるかのように存在している」（Bataille 1976=2002: 23）。

しかし間もなく、そのような世界は〈他者〉の出現によって終わりを告げる。〈他者〉は、こちらの意図に構わず、無作法に触れてくる存在であり、かたやこちらが触れたいと思うときにはそこに存在していない。〈他者〉は、ただあるという自他未分の世界に最初の裂開をもたらす異物である。こうして次第に私たちは、あるの世界（原始的なスープ）の中に自己を受肉（＝胚胎）していく。つまり、あるの世界に溶解していた状態から、《接触 contact》の関係を築いていくのである。接触とは、原理的に自他が別個の存在（＝肉）であることを前提としたうえで、はじめて成立する関係性である。しかし、赤く剥きだされたばかりの私たちの肉は、〈異物としての他者〉を湛えているあるの世界に直に触れ続けることには耐えられない。一方的に抱き上げられたり、触られたり、口に何かを押し込まれたり、執拗に呼びかけられたりするかと思えば、こちらが抱いてほしいときや触ってほしいとき、声を聴かせてほしいときに〈他者〉はそこにいない。〈異物としての他者〉は、常に私たちに対して、《触発的な過剰や欠如》をもたらす存在として立ち現れうるのである。

そこで私たちは、こうした〈異物としての他者〉とともに住まうあるの世界を、何とか手なづけようと試みる。いわば、一方的に触れられるのではなく、触れ返そう、押し返そう、呼び戻そうとする。それは、泣き叫ぶ、暴れる、叩くなどの言語的で象徴的な振る舞いを媒介することではじめて達成される。そうした経験が幾度となく繰り返されていくことで、次第にあるの世界（存在の世界）は、もの世界という「言語や象徴の体系」によって覆われていくようになる。つまり、あるの世界に対し、剥きだしのまま《接触》していた状態から、そこに言葉の世界を保護膜のように挿入することで、〈異物としての他者〉と交渉するための意味秩序へと

参入しようとするのである。ただし、その意味で、〈他者〉とは、決してものの世界の住人ではない。〈他者〉とは、原理的にはあるの世界の住人であり、常にものの世界という保護膜を食い破る可能性をもった存在であり続けるのである。

こうして私たちは、さしあたりあるの世界と接触し続けながらも、そこにものの世界という言葉的で象徴的な意味秩序を緩衝材として挟み込みながら世界を経験するようになる。しかし、この保護膜は、常に〈他者〉の振る舞いや、それによって引き起こされる何らかの事件によって脅かされ、ときに破砕されてしまう。そしてこのとき、言語的な分節の破れ目から、その背後に控えていたあるの世界が不気味に露出し、私たちとの《剥きだしの接触》を取り戻そうとする。あるの世界と直に触れてしまうという出来事は、その構造ゆえに、既存の言語や象徴の体系の中では表現しえない経験となるのである。だがさて、以上のような、あるの世界とものの世界をめぐる発生論的過程に、隠喩はどう関わるのだろうか。

（２）水平の換喩と垂直の隠喩——ラカン派の隠喩的世界論

すでに述べたように、ラカンによれば、あるの世界（存在の世界）と、ものの世界（言語・象徴の世界）を結びつける構造が「隠喩」である。彼によれば、「ものがある」世界へと人間が参入していく際に不可欠となるのが隠喩であり、「主体そのものが隠喩的構造によって支えられている」のだという（竹中 2011: 387）。また彼は、この二世界を繋ぐ隠喩的構造と対比するように、ものの世界の内部構成論理としての「換喩的構造」を指摘している。以下では、竹中均による整理（竹中 2011）をほぼ要約するかたちで、ラカンの隠喩的世界論を確認しよう。

言葉とは、いったい何を指し示しているのか。一見すると、言葉は存在を指し示しているように思えるが、実はそうではなく、ほかの言葉を指し示しているだけにすぎないことに気がつく。例えば、「東」は「西」との、「男」は「女」との対関係においてはじめて指示することができる。つまり、一つの言葉は、それと同じ水準にある——「水平」方向にある——別の言葉を指し示している。このようにして、水平方向に、換喩的に無数の言葉が指し示され続けることで、言葉（もの）の世界は構成されているのである。言葉の世界とは本来、存在（あるの世界）からは自律した閉じたシステムであり、いくら言葉を駆使しても、存在それ自体には近づくことはできない。言葉と存在は常に出会い損なっている。いわば、ものの世界が水平方向にどこまでも広がっているのに対し、あるの世界はそれと平行に広がっており、交差することがない。確かに、平行関係にあるこれら二つの平面を垂直方向に切ってみれば、言葉と存在は対応しているようにも見える。東は、西の反対を指示していると同時に、太陽が昇る方向をも指し示しているようにも見える。だが、この対応関係は、本来脆弱なものである。なぜなら、水平方向に広がり、互いに平行関係にある二つの平面のあいだを、楔を打つように固定する垂直方向の繋がりとはもともと存在しないからである。そのため、あるの世界とものの世界という二つの平面同士は、本来容易に横滑りする可能性があり、垂直方向の対応関係は不安定さをまねがれない。

しかし、それにもかかわらず、私たちは垂直方向に対応関係がある（言葉は存在を指し示している）と意識できる。ならば、どこか最低一か所で、二つの平面が垂直方向に繋ぎとめられていると考えられる。この場合、必ずしも二つの平面が全ての箇所ですべて繋ぎとめられている必要はない。一か所でも繋ぎとめられていれば、二つの平面同士は横滑りしなくなるので、言葉（もの）と存在（ある）の対応関係はそれなりに維持されうる。このような一か所が、ラカンの言う「隠喩」である。それは「言葉と意味を結びつける試み」であり（Fink 1997=2008: 90）、『フロイト&ラカン事典』の「隠喩」の項目説明によれば、「意味が無意味から生じるまさにその地点に位置している」（Kaufmann ed 1993=1997: 17）。このメカニズムによってはじめて、人間は存在の世界から〈他者〉たちによって構造化された言葉の世界——「社会」へと参入することができる。しかし、いったんそれが確立されると、私たちは、意識のレベルでは言葉の世界の中に囚われてしまい、その外部（あるの世界）には踏みだせない。この状態が続く限り、ものの世界の中で、換喩的に「他者」を構成することはできるものの、〈他者そのもの〉に出会うことはできない。だが、このような不可能性のまま、それでも〈他者〉との関わりを作りあげようとするのが隠喩である。（次項で具体的にみていくように）隠喩の獲得こそが、〈他者〉との象徴的な関わりのはじまりなのだと、ラカンはいうのである。

ただし、こうしてアクロバティックに獲得された言葉（もの）と存在（ある）との対応関係は、さしあたり維持されているにすぎない。言葉の世界は、その性質上、水平方向に作動するほかないので、言葉をいくら壮大かつ精緻に展開しても、そこから垂直方向の対応関係に盤石の根拠が与えられるわけではない。隠喩の働きは、存在との垂直的関係を自明視する意識にとっては、気づかれにくい。そして、垂直的な対応関係が暫定的である以上、隠喩は人生の最初に一度おこなえば済むメカニズムではなく、生きている限り、常に作動し続けなければならない。隠喩がそもそも成立しなかった場合、または、いったん成立した隠喩がのちのち上手く機能しなくなった場合、言葉と存在との関わり方には、意識領域の換喩的な言語体系によっては解消されない不安定さをともなってしまうことになるのである。

（3）隠喩が死ぬということ——日常生活世界の隠喩的構成

以上のラカン派の隠喩論を、筆者なりに敷衍してみよう。

例えば、いま目の前に「ペットボトルがある」と私たちは思っている。けれども、もしそこに一輪の花が生けてあれば、それは花瓶だと認識されうる可能性があるという意味において、私たちの前に「ペットボトルがある」という表現は厳密には誤りである。正確には、私たちの前には「ペットボトルのような〈ナニカ〉がある」にすぎない。人間も同様である。いま目の前に「澤田がいる」というのは正確な表現ではない。厳密には「澤田のような〈ダレカ〉がいる」だけだし、もっといえば「人間のようないくつかの〈ナニカ〉がいる」だけなのである。あらゆるものの全てが、本来こうした不気味な隠喩的構造を帯びている。

しかし、私たちは普段、この「のようないくつかの」という隠喩的構造を忘れることによって、「ペット

ボトル（~~のような〈ナニカ〉~~）がある」、「澤田（~~のような〈ダレカ〉~~）がいる」という自明性を作りあげ、日常を生きている。この「のような〈ナニカ〉」という隠喩的構造が抹消されることを、ポール・リクールは「隠喩が死ぬ」、あるいは、「死んだ隠喩」と表現する（Ricoeur 1989=2006: 89）。つまり、私たちは「隠喩の屍」の中で日々を暮らしているのである。

だが、〈他者〉は違う。〈他者〉は常に、私たちの「のような〈ダレカ〉」というなぞらえを裏切り、逃れ去る可能性をもつ特異な存在であるという点で、絶えず隠喩を要請してくる。「優しい人（~~のような〈ダレカ〉~~）である」あなたは、「悪魔の~~ような~~〈ナニカ〉」として、私の前に現れる可能性が常にある。その意味で、〈他者〉は絶えず私たちに生きた隠喩——日常言語の使用規則を越えた詩的な表現——の契機をもたらしうる。〈他者〉は、常にあるの世界から~~もの~~の世界へと越境してくる不気味な〈ナニカ〉であり続けるために、私たちは、それを「～のような」という生きた隠喩によって言葉の世界へと包摂しようとするのである。

同じことを逆から考えてみよう。すでに述べたように、私たちはかつて、あるということだけがある世界（自他未分の原始的なスープ）に溶けていた。しかし、そこに〈異物としての他者〉が亀裂をもたらすことで、私たちは自他を区別し、受肉する。そして、この区別はすぐにあるの世界との《剥きだしの接触》をもたらす。だが、私たちは自己という肉を持ってしまった以上、〈異物としての他者〉を湛えるあるの世界に一方的に直に触れられることには耐えられない。そこで私たちは、あるの世界とのあいだに~~もの~~の世界という保護膜を差し挟もうとする。つまり、異物としての〈他者〉と対話するための言葉の世界を獲得しようとするのである。それは、ある（存在）のスープから~~もの~~（言葉）を切りだす作業である。そして、まさにこの作業こそが、「のような」という隠喩によってはじめてなしうることがらにほかならない。ある（存在）に対して、「～のような」という修飾を施すことで、そこに「～のようなものがある」、あるいは「～のようにあるもの」といいうる言葉の世界が芽生える。それは次第に「～（~~のような~~）がある」として定立され、言葉だけが自律していく死んだ隠喩の世界を形成していく。ただし、もともとあるの世界の住人であった〈他者〉だけは、いつになっても~~もの~~（言葉）の世界へと完全に包摂することはできない。それは常に異物として、あるの世界から~~もの~~の世界を食い破ってやってくる可能性がある。そのたびに私たちは、そこに穿たれた《穴》によって、あるの世界と再び直に接触してしまう。秩序だった言語的な意味世界にひびが入り、私たちは戸惑い、狼狽する。そのような経験こそが既存の言語使用の規則を越えた生きた隠喩によってしか表現しえない「語り得なさ」の根底にある構造なのではないだろうか。言葉の世界という保護膜が何らかの理由で破られるとき、私たちはあるの世界と直に接触しなければならず、再びその穴を言葉で塞ごうとし、「～のような」という隠喩を駆使せざるを得ないのである。

4. 「語りの生成／再編成の条件」——新たな物語が生まれるとき

（1）〈他者〉とともに隠喩を編むということ

隠喩という行為から意味世界を見直すと、おおよそ以上のようなになる。私たちは、非意味的

な混沌としてのあるの世界（ミンコフスキーであれば「ミリュー」と呼ぶだろう）に生まれ、存在を受肉すると同時に、この異様な世界との剥きだしの接触関係に入る。だが次第に、そこにかさぶたのようにものの世界（言語・象徴の体系）が覆い、それを介してあるの世界やその住人である〈他者〉たちと関係していくことを選択する。このものの世界は、先行する〈他者〉たちがすでに換喩的に織り成した自律的なシステムであるが、それを現実として生きるためには、その背後に平行して広がっているあるの世界とのあいだに楔を打ち込まなければならない。その打ち込みが「のよう^な」という生きた隠喩なのである。

この生きた隠喩は、だんだんと死んでいき、人間は意味世界がこのような隠喩の働きによってはじめて創設された事実を忘れていく。しかし忘れても、私たちの意味世界はこの不気味な隠喩的構造を維持している。だからときに、ものの世界とあるの世界の対応関係は横滑りしたり、あるの世界がものの世界へと越境してきたり、ものの世界が何らかの理由で破れてしまい、そこからあるの世界が露出してきたりしうる。このとき人は、ものの世界という既存の言語や象徴の体系によってはうまく語り得ないあるの世界と再び接触することになる。人間にとってこの非意味との接触は、多くの場合とても耐え難い苦痛を経験させる。そして、この露出してしまったあるの世界を、もう一度ものの世界へと包摂するため、人は触覚的な生きた隠喩によって破れた意味秩序の《穴》を縫合しようとするのである。

しかし、この営みは自己完結的ではありえない。メタフォリカルになされるものの世界という生地^の修復は、同時にあるの世界という下地との「合わせ縫い」であり、当事者が紡ぎだす隠喩の「糸」があるの世界に届いているという確証を必要とする。それをもたらしてくれるのが、あるの世界の住人である〈他者〉である。〈他者〉が隠喩的に紡ぎだされた当事者の語りをあるの世界で待ち受け、それに応答し、隠喩の糸をものの世界へとさし戻すことによってはじめて、世界は意味を現実的に取り戻していく。「語り得なさ」を抱えていた層の経験が、隠喩的に語りだされうる条件として、それを現実として受けとめてくれる〈他者〉の存在が不可欠となっていたのは、そのためであるように思われる。隠喩的対話では、聞き手がメタフォリカルな語りにどのように向き合うのかが強く問われるのである。

（２）「下肢切断」患者の語り——“足に悪いことをした”

ここまで、「語りの生成」が他者との隠喩的対話においてなされうる可能性を中心に検討してきた。だが同じことは、「語りの再編成」にも言えるのではないだろうか。人生の「転機」において、新たな物語が形成される局面でも、隠喩が契機となりうるのである。ここでは、勝又正直が紹介している「下肢切断」手術と向き合う患者の語りをみていこう。

勝又は、看護師の T さん——30 歳になってから看護師に転身し、まだ看護の空気に馴染めないでいる——から、彼女が担当する初老の女性患者に「術前訪問」した際のエピソードを聞き取っている。それによれば、患者は「糖尿病の悪化で片足を切断する手術を受けることになって」おり、手術について「てきぱきと質問と説明ができない T さんに対して、患者は一時間の

長きにわたって物語った」。途中、Tさんは師長から呼び出され、「遊んでるかと思った」と言われたという（勝又2010: 149）。勝又はTとの会話を次のように記している。

T：だって患者さんはやっぱり不安だからついつい長く話すでしょ？

勝又：なるほど、そうだろうね。でもその人は「不安」なんていう言葉を使っていたの？

T：うん、確かに「不安」という言葉は使ってなかった。（しばらく考えてから）そういえば、「足に悪いことをした」って言っていたわ。

勝又：（Tの話を聞いていた私は啞然とした。しかし気を取り直して）それから患者はどんなことを言っていたの？

T：ふん（うん）、「私は昔から病氣と付き合ってきた、お父さんの看病や義理のお母さんの看病やら、ずっとしてきた」と言っていたわ。

勝又：それで？

T：ふん（うん）（私の質問にTさんはだまりこんでしまいました）

勝又：じゃ、思い出したらまた教えて。（ibid. : 149-50、下線は引用者）

後日、勝又のもとにTさんから次のようにメールが届く。「あれからずっと思い出そうとしたのだけど何も思い出せません。私は一体一時間も何を聞いていたのでしょうか」。

Tは、患者が一時間ものあいだ語りつづけていた内容をほとんど思い出すことができない。けれども、私（澤田）には、むしろそのことが、患者（当事者）の「隠喩を聴く」ということの一つのあり方を示しているように思われる。師長が述べた「遊んでるかと思った」という言葉に象徴されるように、術前訪問では「手術に関わるいくつかの質問項目についててきばきと聞き出すこと」や、『これからあなたはこれこれの手術を受けることになる、覚悟せよ』という宣告だけがおこなわれ、本来は「患者（のうだうだした）話を聞く場ではない」とされている（ibid. : 150-1）。しかしTさんは、「（手術前の）患者さんは、やっぱり不安だからついつい長く話す」ものだと考えており、その不安と向き合うという営みも当然のことだと考えていた。この点について、勝又は次のように述べている。

Tさんが新米でしかも悪い意味での「看護ずれ」していない手術看護師だったのが幸いしたのかもしれませんが。患者の話を真に受けてしまう、そのナイーブさが、患者の（隠喩的な）「語り」を引き出すことに成功させたのかもしれないからです。（ibid. : 151）

Tさんは、患者の語りを聞き流し、それゆえにその内容のほとんどを思い出すことができなかったわけではない。その証拠に、Tさんは勝又との会話の中で、「足に悪いことをした」、「昔から病氣と付き合ってきた」という、患者が隠喩的に語りだした内容（足や病いを「擬人化」した言葉）をピンポイントで提示している。それも、おそらくこの語りが隠喩であるというこ

とをそれとしては自覚していないにもかかわらず、である。ほかの内容は思い出すことができなくても、それでも T さんが、患者のメタフォリカルな語りは思い出すことができるということ、そのこと自体が「隠喩を聴く」という営みや、隠喩的対話における聞き手側の「構え」についての重大な示唆を含むように私には思えるのである。

科学的なコミュニケーションや日常的なコミュニケーションの中であれば、メタフォリカルな語りは、「せいぜい巧みな、面白い慰めごと」(Minkowski 1953=1954: 73) として扱われ、聞き手は、それらをあくまで修辭的的技巧だとみなし、それ自体を重要なものだと考えることはない。つまり、普段であれば、私たちはより分節化され、より差異化された明晰な言葉のほうを記憶にとどめ、むしろ隠喩的な言葉のほうを忘れていくのである。だが、T さんは違う。彼女は全く逆に、隠喩的な語りのほうをそれ以外の言語表現よりも重要なものとして受けとめているのである。それは、勝又も指摘しているように、まだ看護師の世界に馴染めず、「患者の話を真に受けてしまう」という T さんのナイーブな「構え」によるのかもしれない。だが少なくとも、彼女と患者とのあいだには、「隠喩」を日常言語や科学的言語よりも劣った表現だとみなす偏見がなかったという意味において、科学的でも日常的でもない、特異な対話的空間が生成していたのだとは言えないだろうか。だからこそ彼女は、普段の言語空間に戻ったあとでそれを振り返ったときに、「私は一体一時間も何を聞いていたのでしょうか」と述べるようになったのではないだろうか。

さて、今度はこの語りを語り手(当事者)の側から考えてみよう。二節でみてきた事例とは異なり、ここでの患者の隠喩的な語りは触覚的ではない。おそらくそれは、この語りが「語りの生成」ではなく、「語りの再編成」であることに関わっている。患者は「病氣とずっと付き合ってきた」という言い方で、病氣を付き合う相手、つまり人間のようなものになぞらえている。過去に「病人の看病をしてきたという経験と、これから糖尿病がもたらす片足切断によって障害者として生きて行かなくてはならないという未来とが、『病氣と付き合う』という擬人化によってくくられて」いる。つまり、「これまでの過去を、『病氣とつきあう人生』という形で整理し」、「これから障害者として生きていく未来に、接続させ」ることで、自己物語を再構成しているのである(勝又 2010: 151-2)。そして、「足に悪いことをした」という、「切断される足」の擬人化にはより深い意味が込められている。それは単に、片足切断という状況になるまで糖尿病の治療を十分にしていなかったことへの自責の念を表現することだけにとどまるものではない。勝又は、次のように述べている。

まるで「人格」があるかのように「足」について語ることにはどんな意味があるのだろうか。患者が「足に悪いことをした」と言った瞬間、足は別の人格を持つものとして患者に相対しています。それは患者とは別のものです。患者はすでに、自分とは分離し別個のものとなった足のことを考えているのです。片足が切断された後の状態を、患者はこの喩え(擬人化)で知らず知らずのうちに、先取りしようとしていたのかもしれないと考えら

れます。こうして、片足切断の手術を直前に控えた患者は、「足に悪いことをした」というレトリック（喩えをつかった説得の方法）によって、片足喪失の状況を生き抜いていく自分の物語を紡ぎ出してこうとしているのです。切断される自分の足を別個の意思をもつ者に喩えることで、足をこれからなくすという話から、足を喪失した後その状況を生き抜いていく話へと、患者をつつむ物語は転換していき、足の擬人化はその転換の接続点となっているといえるでしょう。（ibid. : 152）

人生の転機において、これまでの自己とこれからの自己を新たな物語によって繋ぎ合わせていこうとする人間にとっても、隠喩が大切なきっかけ——勝又はそれを「物語生成の種」と呼ぶ——となることを本事例は示している。そこには、看護師のTさんがそうであるように、そして「語りの生成」事例における聞き手たちがそうであったように、「隠喩的な語り」に立ち合い、それを当事者が生きるほかならぬ現実であると受けとめてくれる他者が不可欠となる。なぜなら、隠喩とは、単なる言語という道具ではないからである。それは、意味秩序や物語構成に訪れた〈ナニカ〉を捉え、生きようとする行為であり、「隠喩的対話」における聞き手は、まづもってその「証人」になることがもとめられるのである。

混沌の物語を生きる人々は確かに援助を必要としている。しかし、多くの援助者を自称する者たちがとっさに求めてしまうのは、まづ何よりも、語り手をこの種の物語から引きずり出すことであり、そしてそこから引きずり出すことが何とかという名前の『セラピー』と呼ばれるのである。……しかし、ケアをする人間はまづ何よりもその混沌の物語の証人であろうとする時、はじめて人を支援することができる。混沌は決して克服されるものではない。しかし、新しい生活が立てられ、新しい物語が語られる以前に、混沌が受け入れられねばならない。混沌の中から姿を見せるさまざまな生をケアしようとする人々は、混沌がいつも物語の背景にあり続け、たえず前景へと浮かび上がってくることを受け入れなければならない。（Frank 1995=2002: 155-6、傍点は引用者）

このフランクの言葉には、「隠喩的対話」という特異な相互行為が成立するための最も基礎的な条件が示されているように思われる。日常的な言語使用を超えた隠喩的な語りの存在は、日常的な理解を越えてた経験がそこにあることを暗示している。この暗示は聞き手の意味世界をも動揺させるものであり、それゆえに私たちはその重大さを軽んじたり、無意識に否認したりしているのかもしれない。しかし、この暗示に対して、まづもって「敬意を払う」（ibid. : 155）ことができなければ、聞き手はたとえ語り手と「対面」していたとしても、決して語り手に《出会う》ことはできない。「語り得なさ」を抱えた経験を、何かになぞらえるという行為によって生きようとする語り手に、聞き手が《出会う》ということは、科学的な言語圏や日常的な言語圏においては非現実的なものとみなされかねない《生きた隠喩の世界》を、まさにそのように

生きられている現実なのだと受けとめる「証人」に、聞き手になるということにほかならないからである。隠喩的にしか語りだせない《混沌》の「証人」に、語り手とともに聞き手になるということ、そこにはじめて、「語り得なさ」を抱えた経験が語りだされる自己と他者との可能性の空間——「隠喩的対話」という生の技法の空間が拓かれるのだとはいえないだろうか。少なくとも本稿がみてきた「語り得なさ」をめぐる当事者たちの実践は、そのことを教えてくれているように私には思えるのである。

5. おわりに——生きた隠喩の社会学へ

隠喩とは、狭い定義に従えば、それがどのような事態を喩えているのかが、にわかには聞き手にわからない比喩のことである。だから、隠喩的な《混沌》の語りとは、聞き手にとって「半ば開かれたもの」(ibid. : 231) として差し出されている。この「半ば開かれたもの」として差し出される隠喩について、これまでの社会学はどれほどの注意を払ってきただろうか。

もちろん、隠喩は、現実が言語的に構成されているとみなす構築主義的な社会学にとっても、少なからず注目されてきた(例えば、社会問題の構築性に関する「レトリック分析」など)。けれども、隠喩がそれ自体、単に日常言語(死んだ隠喩)の一種であるという以上に、言語的に構築された意味世界とその外部との境界でやりとりとされる特異な行為(生きた隠喩)であるのだとすれば、それによって何事かを語りだそうとする当事者たちの経験は「構築主義的な」認識論だけでは平板化されてしまいかねないように思われる。それを回避する手立てとして、ラカンやリクール、さらには(本稿では参照しなかったが)エマニュエル・レヴィナスらの隠喩論が手がかりとなるかもしれない。隠喩を生きるということ、あるいは生きられた隠喩の世界へとわけ入るための社会的な理論地平をどのように開拓していくことができるのか。「隠喩的対話」という当事者実践はそのことを社会学に問いかけているようにも思われる。

同じことは、質的調査(とりわけ、ナラティヴ・アプローチ)における方法論にも言えるだろう。インタビュー・データが、研究者と研究対象者との関係性に依存した対話的な構築物だと考えるだけでは、そこで語りだされる生きた隠喩が、当事者にとって重要な意味をもつ生の表現である可能性を見落としてしまうかもしれない。それを積極的に掬いあげていくためには、たとえば「それは何に喩えられますか?」と、ときに隠喩的な対話のモード——それは物事を分節化して語る対話のモードとは位相が異なる——をアクティブに織り込んでいくという方法が考えられるかもしれない。隠喩は、水平的な「差異を生みだす差異」ではなく、垂直的な「なぞらえの連鎖」によって成立しており、その連鎖を遡行(構築ではなく)していくことで、語り手とともに生きられている層の経験を言い当てる表現を対話的にみつけていく可能性に開かれているのである。また逆に、語り手の側から差し出された生きた隠喩を、聞き手(研究者)の側が対話の中で死んだ隠喩(日常言語や科学的言語)に翻訳して殺してしまわないことも大切であるかもしれない。生きた隠喩は、それ以外には語りようがない層から発せられており、それ自体として受けとることが求められているはずだからである。

おそらくは、ほかにも「隠喩的対話」という当事者たちの生きられた実践から社会学が学べることは多くあるように思われる。けれども、どこかしら「語り得なさ」を抱えた層を含む経験——病い、障害、暴力、差別など——へとアプローチし、その当事者の生に寄り添おうとする社会学にとって、隠喩が人間という存在にとってもつ意味を考えていくことに一つの可能性が示唆されているということ、さしあたりそのことを確認して本稿を終えることとしたい。

* 本研究は JSPS 科研費（日本学術振興会特別研究員奨励費、研究課題番号: 13J06860）の助成を受けたものである。

【文献】

- 綾屋紗月 & 熊谷晋一郎. 2010. 『つながりの作法——同じでもなく、ちがうでもなく』日本放送出版.
- 綾屋紗月. 2011. 「痛みの記憶——成長の終わり いまの始まり」『現代思想』39（11）: 56-70.
- Bataille, G. 1976. “Théorie de la religion”, *Oeuvres complètes*, tome VII, Paris: Gallimard. (=2002, 湯浅博雄訳『宗教の理論』ちくま書房.)
- Cauwels, J. 1992. *Imbroglia: Rising to the Challenges of Borderline Personality Disorder*. New York: W. W. Norton.
- Fink, B. 1997. *A Clinical Introduction to Lacanian Psychoanalysis: Theory and Technique*. Cambridge, Mass: Harvard University Press. (=2008. 中西之信・椿田貴史・舟木徹男・信友建志訳『ラカン派精神分析入門——理論と技法』誠信書房.)
- Frank, A. W. 1995. *The Wounded Storyteller: Body, Illness, and Ethics*. The University of Chicago Press. (=2002. 鈴木智之訳『傷ついた物語の語り手——身体・病い・倫理』ゆみる出版.)
- 勝又正直. 2010. 『ケアに学ぶ臨床社会学——理解社会学の再生を求めて』医学書院.
- Kaufmann, P ed. 1993. *L'apport freudien: éléments pour une encyclopédie de la psychanalyse*. Paris: Bordas. (=1997. 佐々木孝次監訳『フロイト&ラカン辞典』弘文堂.)
- 熊谷晋一郎. 2012. 「なぜ『当事者』か、なぜ『研究』か」『日本オーラル・ヒストリー研究』8: 93-100.
- Linehan, M. 1993. *Skills Training Manual for Treating Borderline Personality Disorder*. New York: Guilford Press.
- Manson, P. & R. Kreger. 1998. *Stop Walking on Eggshells: Taking your life back when someone you care about has borderline personality disorder*. Oakland: New Harbinger Publication. (=2007. 荒井秀樹・野村祐子・東原美和子訳『境界性人格障害=BPD——はれものにさわるような毎日をすごしている方々へ』星和書店.)
- Merleau-Ponty, M. 1945. *La phénoménologie de la perception*. Paris: Gallimard. (=1967. 竹内芳郎・小林貞孝訳『知覚の現象学 1』みすず書房.)
- Minkowski, E. 1953. *La Schizophrénie: Psychopathologie des schizoides et des schizophrènes*. Paris: Desclée de Brouwer. (=1954. 村上仁訳『精神分裂病——分裂性性格者及び精神分裂病者の精神病理学』みすず書房.)

- 西村ユミ. 2001. 『語りかける身体——看護ケアの現象学』 ゆみる出版.
- 野間俊一. 2001. 『身体の哲学——精神医学からのアプローチ』 講談社.
- 岡原正幸. 1997. 「感情社会学の成立と展開」 岡原正幸・山田昌弘・安川一・石川准編『感情の社会学——エモーション・コンシャスな時代』 世界思想社, 1-42.
- Perfetti, C. 2006. “Tra corp e dolore: Una coperta troppo pesante”, *Riabilitazione Neurocognitiva*. 2: 81-97. (=2010. 小池美納訳「身体と痛みのはざままで——重過ぎる毛布」『現代思想』(38) 12: 138-56.)
- Ricoeur, P. 1989. *La métaphore vive*. Paris: Seuil. (=2006. 久米博訳『生きた隠喩』 岩波書店.)
- 榊原哲也. 2011. 「現象学的看護研究とその方法——新たな研究の可能性に向けて」『看護研究』(44) 1: 5-16.
- 澤田唯人. 2013. 「感情管理論から感情的行為論へ——『境界性パーソナリティ障害』と呼ばれる生をめぐる」 第 11 回社会学コロキウム「現象学的社会学の現在——時間・感情・他者」 報告原稿.
- . 2014. 「『時間が解決してくれる』ということ——生の脈拍 (é-motion) の傍らで」 岡原正幸編『感情を生きる——パフォーマティブ社会学へ』 慶應義塾大学出版会. 37-54.
- 鈴木智之. 2008. 「他者の語り——構築と応答のあいだで」『三田社会学』13: 3-16.
- 高岡健. 2003. 『人格障害論の虚像——ラベルを貼ること, 剥がすこと』 雲母書房.
- 竹中均. 2011. 「精神分析・社会学・自閉症——『隠喩』の問題を中心に」『社会学評論』61(4): 286-403.

(さわだ たたと 慶應義塾大学大学院社会学研究科／日本学術振興会)